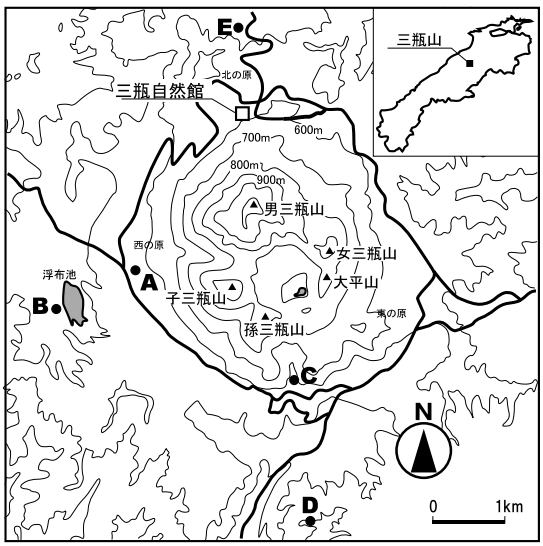
地質ニュース654号，50－51頁，2009年2月
Chishitsu News no.654, p.50－51, February, 2009

三瓶山巡検「三瓶ミニツアー」

中　村　唯　史[1)]

1. はじめに

三瓶山（さんべさん）（標高1,126m）は島根県の中央部に位置し，後期更新世から完新世に活動した火山である（第1図）．溶岩円頂丘が連なる優美な山容を持ち，森林と草原で構成される環境には多様な動植物が生息している．また，出雲に伝わる国引き神話の舞台でもあり，自然と文化の両面において島根県を代表する山である．その山麓の標高600m付近に立地する三瓶自然館は，島根県の自然系博物館として展示・普及・調査研究等を行っている．加えて，観光拠点としての要素が大きいことが特徴である．今回，「地質の日」関連イベント“三瓶ミニツアー”は，参加者に楽しんでいただくことに重心をおきながら三瓶山の自然史的な特徴を紹介することで，「地質」や「自然」への興味を誘うと同時に，三瓶山を再来訪するファン層の拡大を目指して実施した．



第1図　案内図．図中のA～Dは本文中の案内コース．太実線はおもな道路．

2. イベントの概要

このイベントは，三瓶山山麓の地形・地質的なポイントをマイクロバスで巡る一般向けの巡検である．実施日は，5月3～4日で，1時間30分のコースを両日とも1回ずつ巡った．訪れた場所は，火砕物による堰き止め湖の浮布池（うきぬのいけ），三瓶温泉の泉源付近，火砕物の露頭，湧水地点などである．2日間で，島根県と広島県を中心に，遠方は関西方面から50名の参加があった．遠方からの参加者は，旅行を計画する段階で三瓶自然館のホームページを見てイベントを知り申し込んだ方である．家族連れでの参加が多く，年齢構成は幼児から中高年まで幅広い．

3. 案内コース

三瓶山は直径約5kmのカルデラ内に，主峰の男三瓶山（おとこさんべさん）をはじめとする溶岩ドーム群が環状に連なる火山である．以下に，イベントのコースを簡単に紹介する．なお，A～Dは第1図中の黒丸と対応する．

A. 西の原

火砕物等からなる堆積コーン地形で，三瓶山を代表する草原景観が広がる．

B. 浮布池（写真1）

135,000m^{2}の水域面積を持つ堰き止め湖．柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）が歌に詠んだ「浮沼池」と言われている．

C. 湯ノ谷（写真2）

三瓶温泉泉源の下方．泉源は標高520mにあり，

1）島根県立三瓶自然館
694-0003 島根県大田市三瓶町多根1121-8

キーワード：島根県，三瓶自然館，三瓶山，普及イベント，観光活用

写真1　浮布池．池の向こうにピークが連なる．

写真2　湯ノ谷．流れる湯の暖かさを確かめ，歓声があがる．

37℃前後の湯が自噴し，沢となって流れている．

D. 志学展望所（写真3）

カルデラ壁の南縁部にあり，火山噴出物の露頭を見ることができる．

E. 石清水

山麓に数多くある湧水地のひとつ．三瓶山では湧水を利用したワサビ栽培が盛んである．

4. 地質情報等の活用

本イベントの参加者は，基本的に観光が目的であり，地質に対して特に関心が高いわけではない．しかし，観光的な見所となっている場所の地形・地質的な成り立ちを紹介すると，参加者から次々に質問が飛び出し，一気に関心が高まることが感じられる．さらに，質問の内容はその場の生態系や歴史的な事柄に広がり，各人の身近な事例との比較へと拡大する．このことか

写真3　志学展望所の露頭．複数時期の噴出物を見ることができる．

ら，現地を訪れて実際に目でみることが，自然そのものへの関心を育むきっかけになっていると思われる．すなわち，本イベントは三瓶自然館が博物館として実施すべき普及・啓発事業の趣旨に適うものと言える．

また，三瓶自然館は観光施設的な性格も強い．それは，三瓶山が島根県央部の代表的な観光地であることに加え，最寄りの市街地から自家用車で30分程度であり，観光客の誘致が来館者確保の重要な要素という事情による．同時に，地元地域からも観光拠点として期待されている．したがって，三瓶山の自然の魅力を伝えることは，観光誘致という点でも重要である．本イベントは地質的な情報の紹介によって興味を育み，三瓶山への再来訪や口コミで魅力が伝わることも実施にあたって期待することのひとつである．

地質情報は，景観に圧倒的な迫力や美しさを有する場合は別として，見ただけではわかりにくいことが少なくない．これを観光資源として活用する手法として，本イベントのような巡検を定期的に開催することが有効かもしれない．しかし，旅行業法の制約や経費などを考慮すると館の単独事業として継続することは難しい．その課題を解決する手段として，周辺地域との連携が考えられる．幸い，三瓶山がある大田市には世界遺産・石見（いわみ）銀山があり，「地質」が両者をつなぐキーワードとなり得る．近隣の博物館施設，観光施設との連携策として，ガイドツアーの実施を検討するなど，地質情報の有効な活用方法を探りたいと考えている．

NAKAMURA Tadashi (2009)："SANBE mini-tour" as the geological excursion to Mt. Sanbe.

＜受付：2008年10月9日＞